

比べ読みによる訳者の翻訳へのスタンスの違いに関する考察 －日本語訳『おおきな木』の教材化－

河村 岳人*・佐藤 多佳子**

(令和4年9月9日受付；令和4年11月9日受理)

要 旨

シェル・シルヴァスタイン著の『The Giving Tree』は、1976年に本田錦一郎が日本語訳を行い『おおきな木』というタイトルで出版された。その後、本田錦一郎が物故したことを期に、2010年に村上春樹が新たに翻訳し直した。本稿の目的は、読みの交流による比べ読みによって、読み手である参加者がシェル・シルヴァスタイン著の『The Giving Tree』の日本語訳『おおきな木』の訳者の翻訳へのスタンスの違いをどう捉えるかを検証することと本作品が高等学校の学習指導要領に示されている「文体の特徴や効果について考察すること」の教材となりうるかどうかについて考察することである。分析の結果、本田錦一郎は原文に即さず、読み手主体の翻訳へのスタンスを持ち、村上春樹は、直訳的で、書き手主体の翻訳へのスタンスを持つと考える学習者が多かった。そして、比べ読みによって文体の特徴や効果について考察することが翻訳へのスタンスの違いを捉えることに繋がり、高等学校の学習指導要領に示されている「文体の特徴や効果について考察すること」の教材となりうる事が分かった。

KEY WORDS

読みの交流 比べ読み 訳者の翻訳へのスタンス 『おおきな木』

1 問題の所在

『The Giving Tree』は、シェル・シルヴァスタイン（文・絵）によって1964年に米国で出版され、今日まで30か国以上の言語に翻訳されている絵本である。⁽¹⁾ 1976年には本田錦一郎が『The Giving Tree』を『おおきな木』として日本語訳した。『おおきな木』は日本でも大きな反響を呼んだ。その後、本田錦一郎が物故し、出版社が継続して出版できなかったこともあり、2010年に村上春樹が改めて翻訳し直し、再出版された。⁽²⁾ つまり、『The Giving Tree』の日本語訳『おおきな木』は2種類ある。

この2作品を読み比べると、翻訳文に大きな違いがある。訳者の原文の翻訳の仕方によって、作品自体の読みも大きく異なる。例を挙げると、冒頭の「Once there was a tree…」⁽³⁾を本田錦一郎は「むかしりんごのきがあって…」⁽⁴⁾と訳し、村上春樹は「あるところに、いっぽんの木がありました。」⁽⁵⁾と訳している。比べて読んでみると、翻訳文の訳の違いが大きく目立つ。

文学作品を比べて読むことに関して、高等学校指導要領（平成30年告示）解説【国語編】⁽⁶⁾には次のように述べられている。

他の作品と比較するなどして、文体の特徴や効果について考察することを示している。

文体の特徴とは、作家や作品、書かれた時代によって異なる文章の構造や表記の特徴のことであり、その効果は、文体の特徴が読書を通じて読者の感想や印象としてもたらされるものである。一つ一つの作品を吟味・検討するだけでなく、他の作品と比較することによってその作品の文体の特徴や効果を明らかにすることが可能になる。

松本（1997）⁽⁷⁾は次の様に述べている。

くらべ読みは相違点のあるところを特に読みくらべていくのである。作品相互の内容比較を^マ関係して、その読みは、作品の持つ思想性や主題・文体・筋といったものまでも比較するため、読者は拡大した読書力が定着すると期待されている

*上越教育大学大学院（専門職学位課程） **学校教育学系

と述べている。比べ読みを行うことで、文学作品自体の特徴や文体の相違点に気づくことができ、より深く、多様な読みが可能である。

本稿では、本田錦一郎と村上春樹の日本語訳『おおきな木』の比べ読みを通じて、読み手が訳者の翻訳のスタンスの違いをどう捉えるのかを検証していく。そして、本作品が高等学校の学習指導要領に示されている「文体の特徴や効果について考察すること」の教材となりうるかどうかについて考察する。

2 研究の方法

本研究は、下記のようなプロセスをとる。

- ①本田錦一郎版『おおきな木』と村上春樹版『おおきな木』を比べ読みすることで、翻訳文の相違点に気づくような問いを考案する。
- ②その問いを元に、大学院生を対象とした読みの交流を実施、交流の際の発話をICレコーダーで録音する。
- ③発話をトランスクリプトし発話プロトコルとし、発話プロトコルを元に訳者の翻訳へのスタンスの違いを学習者が捉えることができたか、また、どのように捉えているのかを分析・考察を行う。

3 比べ読みについて

松本（1997）^⑧は比べ読みに関して「文学を楽しく味わわせるために行われている授業方法である。一つの文学作品に対して、他の文学作品を重ねて読むことにより、それぞれの作品が明確に理解できるようになり、深く考えることができるようになることをねらった方法である。」と述べている。また、船津（2010）^⑨は次の様に述べている。

本研究で扱う＜比べ読み＞については、『複数のテキストをある観点かをもって比べ、多面的、総合的に読むこと。』と定義付けておく。井上一郎は＜比べ読み＞と＜重ね読み＞をどちらも『二つ以上の作品を比較・対照しながら読書行為を行うのである』としたうえで、区別して使用しようとする。＜重ね読み＞については『中核教材に対してまとまった作品を副教材として提供し、コンテクストの拡大に依るテキスト化を図り、並行して複数の作品を読む行為が主要な目的となる』とし、＜比べ読み＞は『観点を定めて作品の一部を焦点化して教材化を図り、学習資料（ワークシート）などで集中的に議論を深めて読むような活動を主要な目的とする』と定義している。

比べ読みは、異なる文学作品を比べて読むことによって、相違点や相似点が明らかになり、より深い読解が可能になる。今回は、シェル・シルヴァスタインの『The Giving Tree』の日本語訳『おおきな木』の読みを交流しながら比べ読みすることで、本田錦一郎の日本語訳と村上春樹の日本語訳の相違点を明らかにし、両者の翻訳へのスタンスの違いをどのように捉えるかを検証する。

4 調査

調査実施の概要は以下の通りである。

- (1) 調査協力：上越教育大学教職大学院 大学院生 19名
- (2) 日付：2022年7月21日（木）
- (3) 授業者：河村岳人・佐藤真綺・加藤亮純
- (4) 調査における活動の流れ

	活動内容
導入（5分）	○シェル・シルヴァスタインの『The Giving Tree』を最初に本田錦一郎が『おおきな木』として日本語で翻訳し、本田錦一郎が亡くなった後に、村上春樹が翻訳しなおしたことを伝える。両者の翻訳した文章の違いが見られることを述べる。 ○個人で、本田錦一郎訳の『おおきな木』と村上春樹訳の『おおきな木』を読む。

展開 (30分)	<p>○自身の考えをワークシートに記述する。</p> <p>○読みの交流をする。</p> <p>問い1: 「the tree was happy.」をなぜ、本田錦一郎は「木はうれしかった。」、村上春樹は「木はしあわせでした。」と訳したのだろうか。</p> <p>問い2: 「And the tree was happy …but not really」を、なぜ本田錦一郎は「きはそれでうれしかった…だけど本当かな。」と訳し、村上春樹は「それで木はしあわせに…なんてなれませんよね。」と訳したのだろうか？</p>
----------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

5 分析・考察

発話をICレコーダーで録音したものを発話プロトコルに起こし、訳者の翻訳のスタンスの違いが表れたかを分析していく。なお、発話プロトコルの書式は、松本 (2004)⁽¹⁰⁾ に準じる。¹⁾

紙面の都合上、翻訳へのスタンスについて言及している発話者と、どのような相違点を言及したかをまとめて記載する。

(問い1)

班	発話者	本田錦一郎の翻訳へのスタンス	村上春樹の翻訳へのスタンス
1 班	1Sm	幼児向けに翻訳されている。	義務教育を受けた者向けに翻訳されている。
	4Ty	ポップな感じ。	アットホームな感じ。
	17Na	「the boy」の訳が少年の成長と共に「ちびっこ」「そのこ」「おとこ」と変化している。	「the boy」が一貫して「少年」と訳されている。
2 班	1Ic	行為に着目している。	木の受けた感情に着目している。
	8Kt	深い意図はない。	深い意図はない。
	13Tm	深い意図はない。	深い意図はない。
	35Ko	本来「うれしい」と訳す時は「glad」を使うことが多いが、「happy」を「うれしい」と訳していた。	「happy」は「幸せ」に訳すことが多いから直訳的である。
	36Kt	原文を読みかえていることに気付く。	原文に即し、直訳的であることに気付く。
	47Tm	木になっている感じ。木になり切っている。	木を見ている感じ。
	59Ko	木の感情と自分の感情をリンクさせている。	木を俯瞰しているから直接的な感情を書くことはできない。
3 班	13Kr	最後まで「幸せではない」ことを濁している。	最後の最後に「幸せではない」とひっくり返している。
	33Kr	「うれしい」は解釈が収束する。	「幸せ」は多様な解釈ができる。
	60Kr	平仮名表記。	漢字表記。
4 班	1Tk	木を男性的に捉えている。木に父性のイメージを持っている。	木を女性的に捉えている。その理由としては木を表す代名詞が「she」だから。木に母性的なイメージを持っている。
	16Ta	木と少年の関係性を振り返っている。	木と少年の関係を依存的である。
	29Tm	「very much」をあまり訳に反映させていない。	「very much」を訳に反映させて、強調している。
5 班	1Hy	木の瞬間瞬間の感情を見ている。	木の一生を見据えての感情を見ている。
	4Sn	瞬間瞬間の感情に着目している。	喜怒哀楽の全てを網羅的に着目している。
	24Tm	一過性な感情として捉えている。	重厚な感情として捉えている。
6 班	4Hm	子ども向けの文体でわかりやすい。	深みのある感じ。木の依存性を感じる。
	8Or	木にとって奉仕するという行為が「うれしい」と捉えている。	木にとって少年と一緒にいることが「幸せ」と捉えている。
	9Hm		原文「she」を踏襲して、女性的に捉えている。木の母性を感じた。大人向けに書いている。
	31Or		翻訳に自信を感じる。

(問い2)

班	発話者	本田錦一郎の翻訳へのスタンス	村上春樹の翻訳へのスタンス
1 班	1Sm	読み手に考えさせている。	最初から断定的で、決めつけている。
	3Na	読み手へ問いかけている。	決めつけている。
	4Ty	優しい感じ。終始平仮名で翻訳している。	冷たい感じ。作品の筋を一旦、否定している。決めつけ。
2 班	1Kt	木の感情を書いてくる。	木を客観的に書いている。
	5Ko	木と一体になって書いている。しかし、「And tree was happy…but not really」の訳の時は離れた感じがする。	読み手に同意を求めている。また、木に対しても問いかけている感じがする。
	8Tm	自分の訳を再読している感じ。	自分の訳を読者の目線で書いている感じ
	10Ic	木に起こった出来事を自分事として捉えている。希望を捨てられない。	木に起こった出来事を他人の様に捉えている。自分は困らないから、「幸せではない」と断定できる。
	13Tm	温かい感じ	冷たい感じ
3 班	4Kr	読者に考えさせている。	決めつけている。
	6Sw	木が幸せである可能性を残している。	「幸せではない」と決めつけている。
	15Sw		木と少年が一緒にいることが「幸せ」である。
	21Sd	読者に語りかけ、考えてほしいという意図を感じる。	訳者が考えていることを言い切ったうえで、考えてほしいという意図を感じる。
	31Kr		意識的に「幸せ」という言葉を使っている。
4 班	1Ka	「And the tree was happy …but not really」の訳は直訳的。	「And the tree was happy …but not really」の訳は反語の様に訳している。この部分を一番強調したかったという意図を感じる。
	6Ta	解釈の余地を残している。	強調して言い切っている。
	9Tk	「And the tree was happy …but not really」の訳だけ直訳的に感じた。木と少年が離れ離れになっても、結局戻ってきたから「うれしい」という感情はある。	木と少年が離れ離れになってしまったら、もうそれは幸せではないという皮肉が込められている。文学者のような翻訳。
5 班	1Hy	読者に語りかけている。	断定している。木を犠牲的なイメージで捉えている。
	8Sn	読者に考えさせたい意図を感じる。	「幸せ」の定義を持っているイメージ。
	20Sm	読者に読みを委ねている。読者に委ねる優しさがある。	訴えかけているイメージ。自身の主張を貫き通したい意志を感じる。
6 班	1Hm	子ども向けに書いている。小さな子ども目線で物語を読んでほしいという意図を感じた。	原作に寄せている。
	2Kk	読み手に投げかけている。読み手に考えてほしいという意図を感じる。	断定している。
	3Or	木が少年に奉仕していることは、本当に幸せだったのかと読者に問いかけている。	木にとって少年と一緒に居ることが「幸せ」であり、離れ離れになったことは木にとって「幸せ」ではないと捉えている。

分析を通して、学習者は訳者の翻訳へのスタンスの違いを捉える読みができたと考えられる。

全6班の発話プロトコルを分析してみると、以下のような翻訳へのスタンスについて言及している学習者が目立った。

	本田錦一郎の翻訳へのスタンス	村上春樹の翻訳へのスタンス
①	原文には即さず、読みかえている。	直訳的。
②	読み手主体で、問いかけている。	書き手主体で、断定的。

①についての具体的な発話

<p>(1班)</p> <p>17Na 村上春樹さんの方は少年は、最後は少年だけど／／本田錦一郎さんはなんか、大人になった少年は男はってなって(問い1)</p>	<p>(2班)</p> <p>32Kt てことは、村上の方が直訳っぽい？(問い1)</p> <p>36Kt 読みかえているのは本田さん。読みかえている。(問い1)</p>
<p>(3班)</p> <p>なし</p>	<p>(4班)</p> <p>29Tm 私は、え：っと、村上春樹のほうの詩で、えと：「しあわせでした」が一枚目の後ろの方にもあって、その前のなんか「very much」っていう、こっち文でいうなんか、どこだっけな、あ、「very much」の後に来る、この「happy」が幸せと嬉しかったで分かれてるので、「very much」の前を見たときに：村上春樹は：え：っと「誰よりも何よりもその木が好きだった」って言う風に言ってる。本田錦一郎の方は、そうとでも、だい、そうとてもみたいな感じで、なんかちょっと、強調の仕方が村上春樹の方が強いなって感じて、そこから：なんかその「happy」の訳し方も強さが違く出ているのかな：って思いました。(問い1)</p>
<p>(5班)</p> <p>なし</p>	
<p>(6班)</p> <p>1Hm え：と訳の違いとしては、村上春樹は割と原作に寄せた訳？で、本田のほうの訳は、子供向けの翻訳になっていると私は感じるので、なんか絵本を読んで、子供たちに本当なんだろうかっていう、木からの目線じゃなくて、こども、そのちっちゃい男の子からの視点で、ちょっと、物語を見てほしいのかなっていう風にちょっと思いました。以上です。(問い1)</p>	

②についての具体的な発話

<p>(1班)</p> <p>1Sm 私は本田さんの方は木がうれしかったことは本当かどうかは、読み手側に考えさせるてるんじゃないのかと思って、読み手主体なのかなって、筆者に対して／／村上さんは、木が幸せになんてなれるわけないって、最初から決めつけていて、断定しているようなニュアンスに感じて、作者の主観も少し入っているのかなと思いました。以上です。(問い2)</p> <p>3Na 私も似ていて、その、錦一郎さんの方は、読者へ問いかけている形にして、ある、ある程度、その：、いつも木が男の子に尽くしている様子を見て、きっと読者は、なんか、こう、本当に木って幸せなのかなっていうところを感じて、感じるだろうっていうところから、問いかけをしているのに対して、村上春樹さんは、もう、なんか、その読者がえ、本当に幸せなのって感じるころを読者が分かっているであろうっていう前提でこの、Smさんが仰っていたように、決めつけていっているように感じました。以上です。(問い2)</p>	<p>(2班)</p> <p>5Ko (中略) 村上さんの方は、う：ん、読み手に同意を求めている？それで木は幸せになんてなれませんよねって、ねってかなり強い言い方っていう。あなたはそれでいいの？って木に問いかけている感じもするし、木の意志はどうなの？っていう。なんか読み手にも、木にも、両方の方向で、村上さんは、問いかけている。(問い2)</p> <p>8Tm 本田さんは、自分が書いたのを、自分でもっかい読んでいた立場かな。村上さんは、自分で描いた作品だけど、読者の目線で、書いているのっていう感じです。はい。以上です。(問い2)</p>
<p>(3班)</p> <p>4Kr (中略) 本当、「それは本当かな」って問いじゃないですか、「なんてなれませんよね」っていうのは、まるで、解釈はみんなこうだよって確認してるわけだから、もう解釈が決まってるんです、木がどう思っている。なんか、もう決めつけてるって感じが僕は嫌だ。「ほんとかな」って問うて、読者に考えさせる、こっちの形の、本田さんの方が、好きだなんて思いました。どうですか？(問い2)</p> <p>21Sd 「だけどほんとかな」は読者に語りかけて、考えてもらいたくて／／「幸せになんてなれませんよね」は村上さんの方も言い切っているけど／／村上さんの考</p>	<p>(4班)</p> <p>6Ta なんか渡せるものだけ渡して、恩が返ってこない状況が幸せじゃないよねって言ってるのかと、なんか直接的な捉え方してたなって思いました。で、えと：相違点、私はその：見たまんまなんですけど、本田錦一郎さんのほうは、まだ解釈の余地を残しているなっていうふうに思いました。なんか「ほんとかな」って／／言うのが、読者にゆだねて／／村上春樹さんの方は、結構強調して幸せじゃないなんか言い切ってるのが違うなって思いました。以上です。(問い2)</p> <p>(5班)</p> <p>1Hy 印象としてはだけどそれは本当かなっていうのが読者に判断を委ねている／／。本田錦一郎さん、「だけどそれはほんとかな」っていうその、／／こっちに聞いている感じ、語りかけて来るん感じ／／、そう。(3)がして、村上春樹さんの「それで木は幸せになんてなれませんよね」ってほうは断定している。きっぱり言い切ってる。(問い2)</p>

<p>えている、考えを伝えたいので、考えてもらいたいのかな。／／でなんか、「木は幸せになんてできませんよね。」ってところに突っ込んでもらいたいというか（問い2）</p>	<p>8Sn なんかみんな考える幸せっていうのは人それぞれあるんだけど、村上さんの幸せはこの、木がやっていることは幸せと感じてない、ぜ、みたいな／／ことを言ってる、でも、二宮金次郎（本田錦一郎）さんは（笑）／／なんかなんていうんだろう、考えさせるような、嬉しいそうね／／そうそうそう／／あなたが考えたらどう思うみたいな／／感じかな。（問い2）</p>
<p>（6班）</p> <p>2Kk なんか、村上春樹のほうはもう、「しあわせになんてできませんよね」っていう断言してしまってるんですけど、本田錦一郎のほうは、あの：「だけどほんとかな」っていう、ちょっと読み手にとって投げかけ意図もちょっとあるのかなって、それについてちょっと考えてほしいのかなって、ちょっと思いました。</p> <p>3Or （中略）さっきいったみたいな、この読んでる人に投げかけ、っていう意図があるのかなって思って、村上春樹はずっと幸せだった幸せだったみたいな、感じて言ってる一緒に幸せになることが木にとって多分幸せって解釈してて、なんか、自分切らせて結局遠くに行かせるって、なんかほんとに幸せじゃなくね：みたいな、なんてなれないよね：みたいな、感じで、木目線、なんか村上春樹のほうがより木の目線に近いのかな：みたいな、っていう風に思いました。以上です。</p>	<p>20Sm Smです。なんか、そのまま訳されている感じがするなみたいな、のはあって、でもそのHちゃんの聞いたら、読者にね、委ねてて、なんか、ん：、いいなと思ったので、村上さんの、この二つを聞いたときに印象深いのは、村上さんだと思って／／でなんでだろうと思ったのが、「しあわせになんて」っていう、幸せになれませんでした、じゃなくて、なんてって使ってるところが／／そう、強めててなんか訴えかけてんのかなって思ったわけ／／そう、で、なんかその：その読者に委ねてる委ねてないみたいなところで、村上さんは自分のものじゃないけど、自分の考えで、貫き通してやりたいんだっていうのがあって、なんかそれ考えたら、幸せになって使ってるのがすごいなんかいいなって思ったけど、なんか読者にちょっと委ねてほしいっていうやさしさがあるのが本田さんなのかなっていう／／なんかこの解釈でちょっとさっきとは、本田さんのほうがいいのかもって。（問い2）</p>

①について、本田錦一郎は原文に即さない読みかえた翻訳へのスタンスを持っており、村上春樹は原文に即した直訳的な翻訳へのスタンスを持っていると考察した学習者が目立ったのは問い1での読みの交流だった。また、②について、本田錦一郎は読み手が主体で問いかけており、村上春樹は書き手が主体で、断定的であるという学習者の考察が目立ったのは問い2での読みの交流だった。

学習者は比べ読みによって、文体の特徴や効果の相違点を明らかにする。そして、相違点に着目する問いを設定して話し合うことによって、翻訳へのスタンスの違いを捉えることができる考える。

全6班の発話プロトコルを分析していくと、2班の問い1での交流が最も多く訳者の翻訳へのスタンスの違いについて言及していた。なぜ、2班の問い1での交流にて翻訳へのスタンスの違いについての意見が出たのかを詳しく分析していく。

（問い1）「the tree was happy.」をなぜ、本田錦一郎は「木はうれしかった。」、村上春樹は「木はしあわせだった。」と訳したのだろうか。

8Kt Kです。すごい、難しくて、全然何も書けませんでした。え：、「うれしい」と「幸せ」ってどちらも一緒じゃないのかなとか、／／思っちゃたりして、なんか、たまたま本田さんは「うれしい」を選んだし、村上さんは「幸せ」を選んだだけで、そんなに深い意図はないんじゃないかなって、ちょっと思っちゃいました。

9Ic ／／（笑）

（中略）

13 Tm：私も本当に難しくて、よくわからないんですけど、本田さんは単純に「うれしい」、個人として「うれしい」で、村上さんは、木の、なんていうか、価値というか、存在意義を考えたのかなって。はい。以上

です。

（8）

14Kt 「うれしい」は感情ですよ。ね。「幸せ」って感情ですか？

（2）

15Kt 状態ですか？

16Ic 状態のイメージ。

17Ko なんか、私はおなががいっぱいでうれしいと私はおなががいっぱいで幸せだとか。

18Kt 感情じゃないですね。

19Ic 「うれしい」＝

20Kt ＝そう考えると、なんか違いますね。

- (中略)
- 23Kt 「happy」って普通どう訳すんですか？＝
- 24Ko ＝多分
- 25Kt 「happy」って「幸せ」って訳すんですか？
- 26Ko 「幸せ」ですね。
- 27Ic 「幸せ」ですね
- 28Kt 「うれしい」ってどう訳すんですか？
- 29Ko 「I'm glad」もそうだし＝
- 30Ic ＝そっか、そっか、そっか
- 31Ko じゃあ、なんで本田さんは「うれしい」と訳したんでしょう？
- 32Kt てことは、村上の方が直訳っぽい？
- 33Ic うーん、「幸せ」。っぽいんですか？
- 34Tm 直接的な感情って、「glad」なのかな。本田さんが「うれしい」だったですね。
- 35Ko じゃあ、「glad」じゃない。「happy」じゃなくて。じゃあ、あえて本田さんは「うれしい」と訳した。「glad」。
- 36Kt 読みかえているのは本田さん。読みかえている。
- 37Ko そうですね。
- 38Kt なるほど。
- 39 (5)
- 40Ko だから二人にはとらえ方があってことですよ
- ね＝
- 41Ic ＝とらえ方がある。
- (中略)
- 47Tm 村上さんは木を見ている感じで、本田さんは木になっている気分で書いている。
- 48Ko お：：
- 49Kt お：：
- 50Ic お：：
- 51Tm ですね。
- 52Kt なるほど。見方が違う。すごい。＝
- 53Tm ＝木になり切って書いている。／／錦一郎さんは木になっている。
- 54Kt ／／すごい。
- 55Ic ／／錦一郎さんは木になっている。
- 56Kt だから、感情なんだ。
- 57Tm そうですね。
- 58Ic あ：：
- 59Ko 自分から出る感情を／／客観的に見ている。／／な感じ
- 60Kt ／／外から見ているから、状態しかわからないから。
- 61Ic ／／なるほど＝
- 62Tm あ：：。面白い。

8Ktは、当初「happy」を本田錦一郎は「うれしい」と訳し、村上春樹は「幸せ」と訳しているところに深い意図はないと言及していた。その後の13Tmも8Ktと同じく「happy」の訳の違いには、意図はないと言及している。その後の14Ktは班のメンバーに「「うれしい」は感情ですね。「幸せ」って感情ですか？」と問いかけている。この質問から、Ktは「うれしい」と「幸せ」の言葉にはニュアンスの違いがあると考え始めていると伺える。そのことは、20Ktの「そう考えると、なんか違いますね。」という発言から分かる。次に23Ktは「「happy」って普通どう訳すんですか？」と訳し方についての質問を班に投げかけている。それ以後の会話で「happy」を直訳的に翻訳するならば、「幸せ」を使うことが多く、「うれしい」と翻訳する場合では「glad」を使うという結論になった。その結果、32Kt, 33Ic, 34Tm, 35Ko, 36Ktの会話の流れで本田錦一郎は「happy」をあえて「うれしい」としたことへ方向が向いた。そして、Ktは、本田錦一郎は原文を読みかえていて、村上春樹は直訳的だという翻訳へのスタンスの違いを理解した。この時にKtとTmにおいてアプロプリエーション²⁾が起こったと考えられる。文体の特徴や効果の相違点と翻訳へのスタンスとは繋がらなかった学習者が、相違点についての質問を交流内で行ったことが、アプロプリエーションの発生要因であると考えられる。

翻訳へのスタンスの違いがある事が班の中で一致した状況で、47Tmは「村上さんは木を見ている感じで、本田さんは木になっている気分で書いている。」と訳者の木の捉え方の相違点について言及している。この発言により、訳者には翻訳へのスタンスの違いがある事をより強固なものにし、班内での読みをより深化させたと考えられる。

アプロプリエーションが起こったのは、学習者が翻訳へのスタンスの違いについての分からなさを質問によって素直にグループ内へ表出したからである。アプロプリエーションが起こったことにより、交流が活性化し、その結果翻訳へのスタンスの違いについての言及が最も多く出たと考えられる。

6 結語

本実践において、全ての学習者は、訳者の翻訳へのスタンスの違いを捉えることができた。学習者は比べ読みによって文体の特徴や効果の相違点を明らかにし、そして問いを設定し、交流することで訳者の翻訳へのスタンスの違いを捉えることができたのである。結果として、本田錦一郎は「原文に即さず、読みかえている。」「読み手主体で問

いかけている。」という翻訳へのスタンスがあり、村上春樹は「直訳的である。」「書き手主体で断定的である。」という翻訳のスタンスがあると捉えていた。

そして、より多くの訳者の翻訳へのスタンスの違いについて捉えるためにアプロプリエーションが起こることが肝要である。アプロプリエーションが起こるためには、学習者自身の分からなさを素直にグループ内にて表出することが必要であると考えられる。

以上より、高等学校の学習指導要領に示されている「文体の特徴や効果を考察するため」の教材として日本語版『おおきな木』の比喩読みは十分使用できるであろう。そして、今後は、アプロプリエーションが起こった2班の問い1での交流の発話プロトコルとアプロプリエーションが起こらなかった他の班の発話プロトコルを比較分析し、学習者自身が分からなさを素直に表出するための条件を考えていきたい。

注

1) 記述の方法、記号については以下の通りである。

記述の方法

- ・発話の単位は、間と内容（提題表現＋叙述表現）によって設定する。内容的に一連の発話は連続して記述する。
- ・発話には発話番号を付す。
- ・発話者をアルファベットで示す。
- ・漢字・平仮名・片仮名交じりで表記する。

記号

- ／／ 発話の重なり。直後の／／の後の発話が重なっている。
- = 途切れのない発話のつながり。直後の＝の後の発話がつながっている。
- () 聞き取り不能。中に記述のある場合は、聞き取りが不完全で確定できない内容。
- (3) 3秒の沈黙。
- (.) 「。」で表記できないごく短い沈黙。
- ∴ 直前の音がのびている。
- 直前の音が不完全なまま途切れている。
- 、 発話中の短い間。プロソディー上の何らかの区切りの表示を伴う。
- ? 語尾の上昇。
- 。 陳述の区切り。語尾の下降などのプロソディー上の区切りの表示を伴う。
- 下線部の音の強調（音の大きさ）。
- °° 間の音が小さい。
- (()) 注記

2) アプロプリエーションの定義に関して、藤原（2008）⁽¹¹⁾は次の様に述べている。

アプロプリエーションとは、端的に言えば、文化的道具に「媒介された」共同的な「行為」＝活動とみなせる。その学習の特徴は、子どもたちが共同活動への参加すること、それを通して他者とともに活動の対象・目標に迫りつつ、同時に活動の文化的道具について主体的な意味づけを行うこと、その結果として子どもが活動そのものについて自分なりの理解を深められること、に見出せる。

また、金子（2019）⁽¹²⁾は「つまり、アプロプリエーションとしての学習においては「軌轢」が学習者の学びの過程を価値あるものに重要な契機となるということである。」と述べている。

本稿の「アプロプリエーション」という語については、藤原と金子の論述を参考にした。

引用文献

- (1) シェル・シルヴァスタイン・訳村上春樹（2010）「おおきな木」 あすなろ書房 p.56
- (2) シェル・シルヴァスタイン・訳村上春樹（2010）「おおきな木」 あすなろ書房 p.57
- (3) シェル・シルヴァスタイン（1964）「The Giving Tree」 Harpercollins Childrens Books p.4
- (4) シェル・シルヴァスタイン・訳本田錦一郎（1976）「おおきな木」 篠崎書林 p.4
- (5) シェル・シルヴァスタイン・訳村上春樹（2010）「おおきな木」 あすなろ書房 p.4
- (6) 【国語編】高等学校指導要領（平成30年告示）解説編 文部科学省 p.197

- (7) 松本修 (1997) 「比べ読み」「重ね読み」の授業 Groupe Bricolage紀要第15号 p.2 Groupe Bricolage
- (8) 松本修 (1997) 「比べ読み」「重ね読み」の授業 Groupe Bricolage紀要第15号 p.2 Groupe Bricolage
- (9) 船津啓治 (2010) 「比べ読みの可能性とその方法」 株式会社溪水社 p.5
- (10) 松本修 (2004) 「国語科研究における話し合いプロトコルの質的三層分析」 『臨床教科教育学会誌』第3巻第1号
臨床教科教育学会 p.7
- (11) 藤原顕 (2008) 「アプロプリエーションとしての国語科教育の学習」 国語科教育64集 p.10 全国大学国語教育学会
- (12) 金子善則 (2019) 「文学の読みの形成過程におけるアプロプリエーション—対話的な交流における会話上の機能に着目して—」 臨床教科教育学会誌18巻2号 p.2 臨床教育教科学会

The consideration of the differences in translator's stances toward translation by comparative reading

—Incorporating the Japanese translation of “Ookina ki” into teaching materials—

Gakuto KAWAMURA* · Takako SATO**

ABSTRACT

The purpose of this research is to compare the readings of two versions of “Ookina ki” by different translators, and to examine how graduate students perceive the difference in their stances on translation. The second purpose is to consider whether this work can be used as teaching material for “considering the characteristics and effects of style” indicated in the high school curriculum guidelines. An analysis of the utterances of graduate students revealed that many graduate students believed that Kinichiro Honda was translating with the reader as the focus and that Haruki Murakami was translating directly and with the writer as the focus. Additionally, it was found that it is possible to read the characteristics and effects of writing styles by comparing readings.

* Joetsu University of Education (Professional Degree Program) ** School Education